

# 実践的教育活動を通じた地域の記憶の継承

愛媛大学 社会共創学部 教授 松村 暢彦



## 1. 愛媛大学社会共創学部での実践的教育活動

愛媛大学社会共創学部は、「さまざまな地域社会の持続可能な発展のために、多様な地域ステークホルダーと協働しながら、課題解決を企画・立案することができ、地域社会を価値創造へと導く力」をもった学生を社会に送り出すことを目的としている。この目的のもと、学際的な文理融合教育を実施するとともに、1年次からフィールドワークを配当する教育カリキュラムを構築している（表-1）。実践力を育成する科目では、多様な地域ステークホルダーと協働し、複眼的な洞察力・想像力・課題解決力を身につけることを目的とし、学部共通の必修科目としてフィールドワーク科目から6科目11単位とインターンシップ科目から1科目2単位の合計7科目13単位以上習得しなければならない。これらに加えて、各学科で指定する実践力育成発展科目の単位を修

得しなければならない。

このような卒業要件に含まれる「正課教育」、部活動やサークル活動といった学生の自発的活動である「正課外活動」とは別に、卒業要件には含まれない、あるいは単位付与を行わないが、愛媛大学の教育戦略と教育的意図に基づいて教職員が関与・支援する教育活動や学生支援活動として「準正課教育」が用意されている。平成30年7月豪雨では、社会共創学部は準正課教育の枠組みで災害ボランティア活動の支援を行い、延べ360名を超える学生・教職員が参加し、被災地に大きな貢献を行った。

本稿では、これらの実践的教育・研究活動の中の一例として、地域の記憶の継承による地域活性化のプロジェクトの報告を行う。

表-1 愛媛大学社会共創学部の実践力育成科目（学部共通）

科目	学年	内容
フィールドワーク入門 (必修2単位)	1年/後	地域の課題解決を進めるための方法・スキルを学ぶ。
フィールド基礎実習 (必修1単位)	1年/後	社会共創を学ぶトライアル実習として位置付けられ、身近な地域コミュニティをフィールドに、主体的に地域を見る・考える方法を学ぶ。
フィールド実習 (必修2単位)	2年/前	愛媛県内の4つのフィールドにおいて、地域ステークホルダーとともに、専門領域横断の多様な視点から地域の課題について考え、コミュニケーション力、協働基礎力を身につける。
プロジェクト基礎演習 (必修2単位)	2年/後	社会共創に必要な様々な専門分野を活用しながら、地域ステークホルダーとともに地域の課題や可能性について考え、課題原因究明力を身につける。
プロジェクト実践演習 (必修2単位)	3年/前	プロジェクト基礎演習での課題を踏まえ、再調査・分析を進めるとともに、プロジェクトを企画・実践し、課題解決立案力を身につける。
プロジェクト応用演習 (必修2単位)	3年/後	実践から生じた課題を踏まえ、課題解決策を検討するとともに、課題解決型プロジェクトを実施し、提案力・調整力・マネジメント力を身につける。
海外フィールド実習 (選択6単位)	3年/前	海外の大学の学生とフィールドワークを協働で取り組むことにより、国際コミュニケーション能力、国際性、協調性、課題解決能力を身につける。
インターンシップ入門 (必修2単位)	2年/前	企業、NPOなどの就労現場を体感し、多様な社会人と接することを通じて、企業などの特徴や課題を把握するとともに、課題解決のために必要な専門知識、スキルの意義を認識する。
海外インターンシップ (選択2単位)	3年/前	海外企業における就業意識、異文化に対する理解を深めるとともに、グローバル化の波の中で、地域の課題を解決する就業意識・判断力・想像力・行動力・危機管理能力を身につける。
実践力育成発展科目 (必修・選択必修4～6単位、各学科で指定)	1～4年	各学科の専門性に応じ、実践力をさらに高めるため、フィールドワーク・インターンシップ等の実践的応用科目を開講している。

## 2. プロジェクトの背景

私は高度成長期につくられた街、いわゆるニュータウンで育った。今では「目新しさ」「上流感」は影を潜め、没場所性が際立ち独自性もないと言われている。しかし、いくらニュータウンの歴史が浅いといっても40年来の歴史を有し、その間、住民の生活がその空間で営まれ、さまざまな住民の記憶が重層することによって空間を場所化してきた。たとえば、現在では閑散とした街区公園で公園としての機能や魅力が失われてしまっている、ある住民にとっては自分の子どもが苦労の末やっと自転車に乗れるようになった思い出の詰まった大切な場所かもしれない。

「人が死ぬのは一度でも人間は二度死ぬ」という言葉にあるように、人間は人との記憶の中で生き続ける存在でもある。地域とともに暮らす住民の大切な思い出、場所に染みついた思い出、記憶を共有することによって、一見失われてしまったかに見える地域の絆を取り戻すことができるかもしれない。私たちの家族、近所の人々との思い出、小さな物語を地域社会で共有することで、なんとなくつながっている感覚、地域のきずな、地域愛着を回復することができるかもしれない。こうした小さくも貴重な場所の記憶はこの世界のあらゆる地域にちりばめられていると同時に、消えてなくなりつつもある。

そこで、地域のイベントなどを通じて地域の物語を収集し、その物語の実践的な取り組みを展開することで、地域愛着の形成効果を検証するプロジェクトを行った。

## 3. プロジェクト対象地域の概要

プロジェクト対象地域を松山市久米地区に設定した(図-1)。久米地区は松山市の中心部より南東部に位置しており、地区の北東部には観音山があり、南部には堀越川・小野川が流れている。また、主要道路として県道334号、国道11号が通り、伊予鉄横河原線が東西に伸びている。人口は29,860人(2017年時点)、世帯数は12,788世帯となっており、松山中心部へのベッドタウンとして機能している。

久米地区は平地が多く、また河川や池により水利が優れていることから、もともと稲作が盛んな農村の特色が強い地域であった。しかし、昭和30年、40年代の高度経済成長期には、かつての人々の生活を支えていた農

地の宅地化が進み、1960(昭和35)年からの15年間で2.4km<sup>2</sup>(24%)の農地が失われた。都市部への人口集中で松山市の大規模化が進んでいく中、1963(昭和38)年には、温泉開発が始まった。東道後温泉・ファミリー温泉・鷹ノ子温泉などが整備され、その結果、東道後温泉郷と呼ばれるようにまで発達した。

久米地区には小野川、堀越川、内川、悪社川などの都市河川が存在する。これらの川は、大雨の際に、頻繁に洪水を引き起こし、人家や水田に甚大な被害を与えてきた。1943(昭和18)年には20数日に及ぶ豪雨が降り続け、その際に河川が決壊、橋が崩壊し、田に植えられた稲などを流したという。この大災害の復興は、その翌年に実施され、当時の小・中学生が大いに働いたという記述も残っている。昭和40、50年代にいわゆる三面張りの治水工事が実施され、これらの被害は抑えられたが、川を棲み処にしていた魚類や昆虫などの生物は環境変化に対応できず、姿を減らした。

久米地区の北方の山々から小野川・堀越川などにかけては、農業用水確保のため溜池が多かった。しかし、1964(昭和39)年の北部幹線水路、1967(昭和42)年の面河ダムの建設により、溜池の需要が減少し、その数を減らした。南久米町の三ツ池は埋め立てられて1980(昭和55)年に南久米公園になり、北久米町の乃万池は1982(昭和57)年に北久米小学校になった。また、久米地区南部には重信川の伏流水の影響で、泉が多く存在した。これらは、昔子ども達が魚を捕まえたり、泳ぎを練習したりする遊び場となっていた。しかし、1975(昭和50)年あたりからの泉の埋め立てや土手の護岸化、遊泳の禁止などの規制が立て続けに実施され、遊び場としての機能を失っていった。

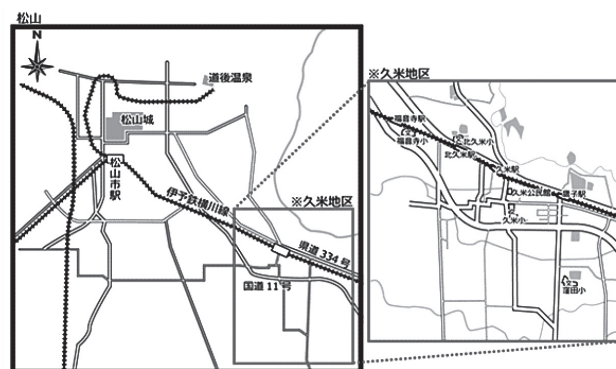


図-1 プロジェクト対象地域

#### 4. 実践的教育活動による地域の記憶の継承

##### 4.1 地域の思い出の収集

久米地区では公民館活動が盛んなことから、久米公民館を通じて地域での思い出を語ってくれる住民の紹介や活動場所を提供していただいた。2017年の東道後温泉祭りでは、一つのテントを借り、祭りに来られた地元の方々の地域での思い出を集めるブースを作らせていただいた(写真-1)。A0サイズの発泡スチロール製の板に久米地区の1966(昭和41)年当時の住宅地図を貼り合わせたものを用意し、旗に地域の思い出を記載してもらった「思い出旗」を該当する場所に刺してもらった。また、公民館で行っている通学合宿(小学生が1週間公民館に泊まり込み、そこから小学校に通うことで自立心を養う取り組み)で自習時間を活用して、久米地区のガリバーマップを用意し、そこに小学生の地域での思い出を記載してもらった(写真-2)。さらに、公民館活動を行っているサークルに参加されている方々や地域の方々から公民館でヒアリングもあわせて行った。

次に、多くの人から地域での思い出を集めるために、町内会を通じてアンケートを配布した。その結果、地域



写真-1 東道後温泉祭りでのワークショップ



写真-2 通学合宿でのワークショップ

の思い出として自然環境に関する記述が145件、都市施設(道路や駅などの社会基盤施設や小学校などの教育文化施設)に関する記述が286件集まった。たとえば、1955(昭和30)年頃の商店街に関するものでは、「日尾八幡からまっすぐ伸びた通り両側に個人商店で粉屋、キャンディ屋、自転車屋、八百屋、肉屋、魚屋、ブリキ屋、下駄屋、金物屋、散髪屋、洋品店、米屋、薬屋、たばこ屋、酒屋、鍛冶屋、豆腐屋などがあり、久米駅近くのゴミ捨て場、ひめぎんあたりに映画館があり、夕方になると音楽が流れ毎日上映していました」といった在りし日の久米地区のにぎやかな日常生活がしのばれる記述や、1965(昭和40)年頃の溜池では「私が高校生の頃、この池でよく泳ぎました。今は一部埋め立てられ、ありませんが、昔は島もありました。池に立っていると小魚が足をつっついてくれました。すね毛を水草と間違ったのかもしれないですね。現在では、この池は私の散歩コースになっています」といった昔と今の暮らしを比較するような記述も多かった。

居住年数別の思い出の特徴として、居住年数61年以上の住民は自然環境の記憶が最も多く、居住年数31~60年の住民は自然環境の記述頻度が減り、道路や駅での記憶が多くなった(図-2)。さらに居住年数30年未満の住民は、教育文化施設での記憶が多かった。これらの特徴は3章の地域の概要で述べた地域の変容と対応していることがわかる。

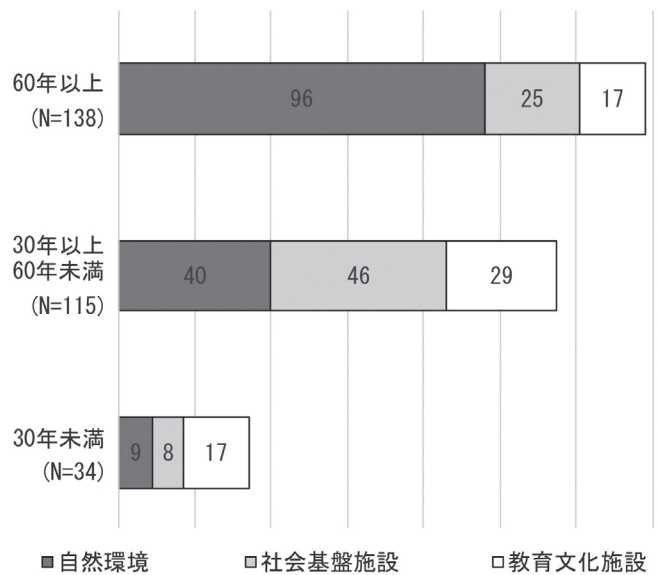


図-2 居住年数別の思い出の場所の特徴



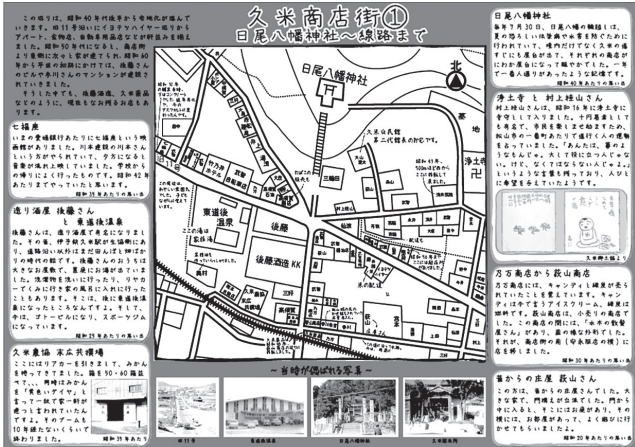


図-3 久米商店街のまちあるきマップ

### 4.2 思い出集の作成と配布

収集した地域の記憶の更なる共有化をすべく「昭和の久米商店街マップ」と「久米郷里新聞」を作成した。「昭和の久米商店街マップ」は、昭和初期から中期にかけての商店街を示したもので、多くの住民にとって地域の買い物の拠点だった記憶をもとにしている(図-3)。「久米郷里新聞」は、地域住民の語った記憶を地域全域で共有することを目指して、2017年4月から11月にかけて、合計4号を発行し、町内会を経由し総世帯約12,000戸に配布した(図-4)。第1号では、駅舎の新設事業が進展していたため、1890(明治23)年からの地域の駅の歴史を紹介するものを作成した。第2号では、地域の商店街についての情報を新聞形式に書いた。第3号は、夏季であったため、地域と川や溜池などの水との関わりから、水環境での遊びや、豪雨から引き起こした水害などを紹介した。第4号では、稲刈りの時期と重なったため、昭和初期の地域の産業の大部分を占めた稲作と、そこで営まれていた年中行事をまとめた。

### 4.3 地域の記憶を題材とした教育プログラムの作成と実施

2018年の通学合宿では、小学生が地域の記憶や自らの体験を編集し新聞を作成する授業を開いた(写真-3)。そこでは、小学生自らが新聞を作成できる手引きとして、完成イメージ、地区の地図、参考となる記事・取材ノートを準備した。60分間で新聞を作成することとし、こちらが準備した資料を書き写すだけでなく、地域の方々から取材ができるような体制をとって、参加した小学生が地域の記憶を聞き出すことができる環境を作った。また、小学生自らの記憶を書いてもらう欄を新聞に



図-4 久米郷里新聞



写真-3

とり、その場所を知っているからこそ書き起こせる内容を追加してもらった。このほかに郷土学習プログラム「久米\_タイムスリップ」を作成し、2018年の冬に公民館で実施した。地域の記憶を種類別、年代順に並べていくカードゲームとその振り返りからなる授業で、地域アイデンティティを醸成させることを目的としている。

#### 4.4 地域の記憶の継承の効果

これらの地域の記憶の収集と共有の実践の評価のために、地域の方々を対象にアンケートを実施した。その結果、「久米郷里新聞」の認知度は71%と高く、地域の記憶の共有が進んだことが推察された。さらに郷里新聞の既読者と未読者の地域愛着の事前と事後を比較した(図-5、縦軸は地域愛着の平均値。最大値5、最小値1)。その結果、地域の記憶の共有を目的とした郷里新聞は地域愛着を有意に上昇されることが明らかになった。

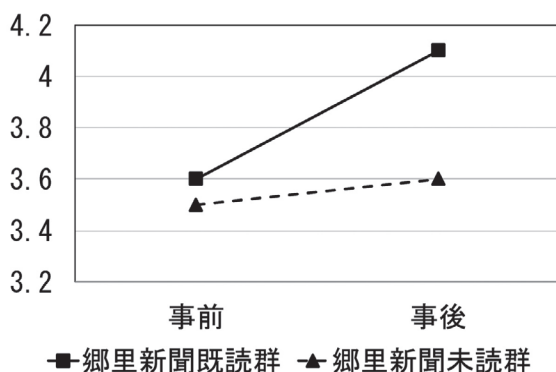


図-5 地域愛着の変化

## 5. まとめ

日本の都市の空間は、昭和30年、40年代に大きく変容した。松山市も例外ではなく、伊予鉄道沿線をはじめ、都市化が一気に進んでいった。しかし、その当時の住宅地図は未刊行で空間の移り変わりを知る手がかりが限られている。しかもこの時期を境に地域での暮らしが大きく変わり、それ以前の暮らしの記憶を留めている世代の高齢化が進んでいる。こうしたことが原因で、過去の地域の記憶の断絶を引き起こし、地域の持続性の危機をもたらしている。その一方で、高齢者の幼少から壮年にか

けての回想に対して若者の聞き手が共感的、支持的に関わることで、高齢者の人生の再評価、人生の満足度の向上を図る介護予防の援助技法として広がりつつある。こうした回想法によって高齢者の心理的健康の回復が期待できると同時に、語られた昭和30、40年代の地域の暮らしは、地域の空白の記憶を埋め、コミュニティの持続可能性を高める可能性を持つ。

こうした大学生による地域の記憶の継承をテーマにした実践的教育活動は、大学生が地域で長年暮らしてこられた方々と交流すること自体が高齢者の生きがいづくりに寄与すると同時に、地域の記憶をまとめて共有することにより地域の住民の地域愛着を形成し、地域再生につながる可能性を持つ。こうした取り組みは、地域の空間的変容が大きいところほど効果が見いだされることから、災害に被災した地域にはより一層意味を持つ。今後、実践的教育活動を通じて被災地域での地域の記憶の収集と共有を進めていきたいと考えている。

## 【参考文献】

- 1) 姫井大輝・松村暢彦・片岡由香：地域の記憶をもとにした学習教材の相互行為分析，土木計画学研究発表会・講演集，Vol.57，2018
- 2) 松村暢彦・尾田洋平・來田成弘・楠田勇輝・平井祐太郎：場所の記憶の共有化による地域のなじみに及ぼす影響～兵庫県川西市大和団地をケーススタディとして～，土木学会論文集D3，Vol.67，No.5，pp.417-425，2011

---

**Profile 松村 暢彦** (まつむら のぶひこ)

愛媛大学社会共創学部環境デザイン学科 教授

1991年大阪大学工学部卒業、1995年大阪大学工学部助手、2014年愛媛大学工学部教授、2016年度から現職。博士（工学）。専門は、土木計画学、都市・地域計画学。

交通政策の環境改善効果の予測や社会的合意形成に関する研究を行ってきた。その後、より豊かな社会の形成のためには、工学的なアプローチだけではなく、社会心理学を応用した態度行動変容アプローチにより、地域づくり、まちづくりの実践的な研究に転ずる。近著として、「モビリティをマネジメントする（学芸出版社）」、「防災まちづくり・くにつくり学習（悠光堂）」、「緑の交通政策と市民参加（大阪大学出版会）」などがある。

日本都市計画学会2010年度年間優秀論文賞、第17回工学教育賞 業績賞、2019年度日本福祉のまちづくり学会学術賞などを受賞。

---